2014年（平成26年）
第78号
（6月1日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
編集委員長：渉外広報　植田恭司
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211
FAX (075)762-2266

体育館の会場いっぱいに“こころひとつに”笑顔あふれる

子供たちと躍る佐藤教会長

若者がマトイを披露

紙芝居で平和を学ぶ子供たち

５月１８日、京都教会体育館において「第３回 こころひとつにフェスティバル IN 青年の日 2014」が開催されました。会員・未会員を合わせ４５０人余りの参加者がありました。

このフェスティバルは、書家の吉川寿一氏作の「一心」幕の披露をきっかけに、東日本大震災の復興と世界平和の願いを込めて、みんなが「こころひとつに」なれるようにと、実施されています。

フェスティバルに先立ち、親子が聖壇に上ってご供養のお役をつとめました。みんなは仏さまの前でこころがひとつになると祈りを込めていました。

その後全員地下体育館に移り開会です。オープニングで佐藤教会長は「うどんが好きな人、そばが好きな人の違いがあっても麺類が好きであるという共通点を見つけることで、こころがひとつになれます。今日はそういう日にしましょう」と述べました。

続いて、各支部の模擬店、ゲームコーナー、バザーなどがスタート。ステージでは、教会長さんも一緒にアンパンマンマーチに合わせてのダンス、ゆめポッケの紙芝居、纏披露と行われ、子供たちも一日楽しみました。

なお模擬店、バザーなどでの収益は、一食ユニセフ募金・京都新聞社会福祉事業団に送られました。

輪投げはちょっと難しい？

テンポよくリズムに合わせ

何が当たるかな？お楽しみ

時々刻々

最近読んだ本に「エレベーターの『閉』ボタンを押さない」という文章がありました。そう思うと『開』より『閉』の方がすり減っているところが多く見られます▼急いでいる人が多いからかも知れませんが、見方を変えると『開』は乗ってくる人のために押しますが、『閉』は自分の都合で使っているのではないでしょうか▼人と人、国と国の間でも『開』ことで交流し、理解し合うことができますが、『閉』では互いが疑心暗鬼となり、摩擦を生じるのではないでしょうか▼庭野会長は「三つの実践」（①“はい”という返事、②朝の挨拶、③履物を揃える）を説いています。これによって、自分中心のこころを改めようというものです▼個人も国も「情報を秘密にしよう」という風潮にあります。これにより、こころを『閉』じるよりも、胸襟を『開』いていく世の中の方が、平和であると思います。

今月のことば～「悦びを　伝えよう」～

教務部長　　大森　得恵

京都教会の各部長による今月のことばの掲載も５回目を迎え、今回は教務部長が担当します。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

京都教会発足55周年の意義あるありがたい年も、はや上半期を終えようとしています。下半期に向かい今一度心を整え、精進してまいりたいと思っております。

今月は佼成誌６月号で、庭野日鑛会長から**『悦びを伝えよう』**のご指導を頂戴しております。

まず、最初に「悦びを分かちあう」ことについて述べておられます。小さな子どもが、驚きや悦びを知らせたい一心で親に話し、親は共に喜びを味わいます。また、仏さまの教えを学び実践する中で、感謝にめざめ、感極まってその悦びを仲間に語る姿には**「伝えずにはいられない」**という素直で一途な心のはたらきがあると、教えて頂きました。

また、生あるもののなかで、言葉をとおして他と悦びを分かちあえ、**共感できる**のは、唯一、人間だけに授かっている、素晴らしい特性だとお示し頂いています。

後半の**「感動を伝える」**が「悦びを伝えること」だと具体的な事例を用いて語っておられます。日常生活のなかで「感動」を味わうことはだれでも経験しており、この感動や悦びを素直に人に伝えることが、法を伝えることに、直結していくのだと教えて頂いています。

振り返ってみますと、私にとって初めて感動と感激を味わったのは、青年期の頃、青梅の練成道場で開かれた、２泊３日の練成会に参加した時のことでした。その時の私は10代後半の思春期真っただ中、ちょうど反抗期で、母親に反発し、突っかかってばかりの生意気な娘でした。

全国から参加した若者同士、最初は初対面でぎこちない雰囲気でしたが、宿泊し、何度も法座に入るうちに、誰にも話したことのない、辛さや苦しさ、淋しさを出し合い、理解し合い、仲間で共有することができて、一体感を味わい、癒され、孤独感から、解放されたのです。

そして、我儘な娘を受け入れ、許してくれている母や家族、回りの人達の愛情に気付き、申し訳ない気持ちと、感動の涙でイッパイになりました。

この後しばらくは、出会う人すべてが素晴らしく、良い人に見え、まるで世界が違って見えるようになりました。そして、この感激を誰かに聞いてもらいたいと思い、そこから青年部の仲間と訪ね、悦びを伝えていくようになりました。

この経験は、まさしく**人生のターニングポイント**でした。あの時の純粋な気持ちが、ご法話の中にあります、悦びを「伝えずにはいられない」という素直で一途な心であったと言えるでしょう。

そして法話の最後に、善い行いをしている**人を見て「素晴らしいなあ」と感激し、賛嘆する**。仏教ではこの賛嘆することに大きな功徳がある。その感激が人から人へと伝わり、伝え聞いた人が悦ぶときの功徳はいっそう大きいと教えています。そして、共に悦びを分かちあうことで、自己一体感を味わって生きることができるのだと思います。

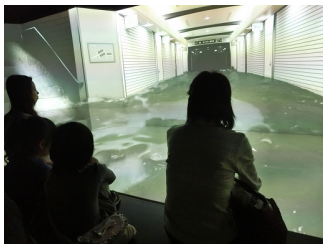
「法は人によって弘まる」といわれるように、私たち一人ひとりの感動や悦びが、何よりも大切であり、話す人も聞く人も、ともに、深い悦びが得られるふれあいを心がけ、周りの人々に悦びを運ぶ者でありたいと結んで頂いています。

これから、常に温かいふれあいを心がけ、多くの人との出会いを大切にし、悦びを運ぶ私でありたいと思います。ありがとうございました。

万一の時に備えて　～防災センターで体験学習～

５月17日、洛叡支部の組長さんたち１５人が、京都市民防災センター（京都市南区）で体験を通じた防災学習を実施しました。

ホテル火災に遭遇した煙の中での避難、大雨のため地下街に洪水が迫ってくる恐怖を４Ｄシアターで実感、風速３０メートルを超える強風を体感、震度７の地震の怖さを実感、消火器を使った訓練などを体験しました。



4Dシアターで地下街の洪水を体験

水深 20 cmになるとドアが開けられない

31 日には、支部において非常時の緊急対策についての勉強会が行いました。洛叡支部長の上杉さんは「今回の体験を次の勉強会に役立ていきたい」と述べていました。

６月１日に発送式　～アフリカへ毛布をおくる運動～

今年もワタキューさんから強力な支援

４月１日から始まった「アフリカへ毛布をおくる運動」。今年は600枚ほど集まりました。その一枚一枚の毛布に、アフリカの人たちに届けるメッセージを書いた布を縫い合わせ、いよいよ発送の時を迎えました。６月１日に発送式を行った後、東京に送付します。

今年も多くの協力がありました。中でもワタキューセイモア株式会社（京都府綴喜郡井手町、以下ワタキュー社）からは、毎年多数の毛布を提供してもらっています。ワタキュー社は病院寝具などのリネンサプライを展開しています。

宇治明社のMさんとNさんが、ワタキュー社のM氏に依頼し、今回も400 枚の毛布を提供して頂きました。用意して頂いた毛布は地区明社の壮年たちによって、教会まで運ばれました。

運動について学んで、街頭募金に立つ

一方、青少年たちは５月３日午前、教会でアフリカへ毛布をおくる運動の勉強会を実施しました。まだまだ現地では毛布を必要としていることを認識し、輸送費が個人の寄付だけでなく、一食ユニセフ募金からも拠出されていることなどを学びました。（左写真）

そして、午後からユニセフ街頭募金を四条河原町で行い、約40名の参加がありました。２時間弱でしたが、５万円強の募金が集まり、全額ユニセフに寄付されました。（右写真）

京都「明るい社会づくり運動」トピックス

全国集会の具体化が進む

５月25日、「全国集会in京都」第３回実行委員会が開催され、集会の内容が具体的になってきました。

京都らしいおもてなしができるようにと、議論にも熱がこもってきています。（開催概要は本紙先月号に記載）

７月には全国からの参加申し込みの受付が始まります。提唱45周年にふさわしく、参加者全員で原点を再確認し、明るい社会づくりに貢献できることを目指します。

第24回福祉バザー（宇治明社）

５月25日に宇治市明るい社会づくり運動の会主催の第24回福祉バザールが宇治市総合福祉会館前で開催されました。バザーの他にも焼きそば、カレー、唐揚げ、串かつ、コロッケ、おはぎ、たい焼き、ジュースの販売もありました。

天気もよく、地域の多くの方々が参加されました。このバザールでの収益金は宇治市社会福祉協議会「ふれあい基金」に寄付されます。

鈴木源太郎氏、旭日双光賞を受賞（京洛明社）

５月17日、京洛明るい社会づくり運動の会（京洛明社）は、同会会長の鈴木源太郎氏が今年の叙勲で旭日双光賞を受賞されたことを祝し、会員が集まって祝賀会を開催しました。

鈴木氏は京都府議会議員を長年務め、教育や地域の活動にも活躍されてきました。

集まった会員は「健康に気をつけて、今後も益々活躍して欲しい」とお祝いの声をかけていました。

藤森神社を清掃（伏見明社）

5月5日、伏見明るい社会づくり運動の会（伏見明社）は、毎年恒例になっている藤森神社で行われる駈馬（かけうま）神事に併せ、早朝に清掃奉仕を実施しました。

同神社で伏見支部の総会を行うなど、良好な関係を築き上げています。

平和活動・ＷＣＲＰに情熱を注ぐ教会　大田教会壮年部長　五十嵐一賀氏　に聞く

全国の中でも、教会が単独で世界平和に向けて海外に直接支援することはあまりありません。そこで、今回は、そうした取り組みを行っている東京の大田教会からに教えて頂くことにしました。

★★★